

これからの情報教育 ～課題と展望～

江戸川大学 学長 市村 佑一

江戸川大学情報研究所は平成 14 年の設立以来、「情報教育」に関わるさまざまな研究に取り組み、研究所の紀要「**Informatio**」には数多くの論文や EDO-NET 関連の報告書等が掲載され、「情報化」を標榜する江戸川大学にとって重要な役割を果たしてきた。

20 世紀末に始まった「通信技術」の急速な発展により現在「第二次産業革命」ともいえる「ICT 革命」が進行、産業構造の変化に大きな影響をもたらしている。その流れのなかで開学時における「情報化」についての考え方もまた次のステップに入ったといえよう。

すでに新生は高校において情報教育の授業を受けてきているが、パソコンや日常化した「ケータイ」などその利用実態には個人差が大きくみられる。既に学内では無線 LAN や e ラーニングが進展、大学としてはトップレベルの基盤整備を進めてきた本学としては「情報基礎」などいわゆる基礎教育のありようやその後の情報文化学科を中心とする専門課程におけるカリキュラムとの関係など従来にない課題に当面している。

江戸川大学では入学時から学生にパソコンを貸与し、履修科目の登録やシラバスの検索あるいは教師とのやり取り、学内掲示板である「エドポタ」の活用などを推進してきた。また、映像資料やデータをパワーポイントを含めた情報技術を生かして多くの教師がさらに魅力的な授業を行えるよう新たな支援策も検討中である。一方、オンデマンド授業など他大学との間では単位互換も含めた試みも進み、学内のみならず対外的にも新たな局面を迎えている。また、ネットを利用した「EDO-TV」による映像発信では校内放送や全国放送コンクールの一端を紹介するなどさまざまな試みが行われてきた。今年 2 月、つくばエクスプレスの「流山おおたかの森」駅に付設の本学のサテライトセンターには地域貢献という役割も期待されており、大学がこれまで培ってきた情報技術に関するノウハウを地域にどれだけ還元できるかが課題となっている。

近年ブログの炎上をはじめネットにおける誹謗中傷が後を絶たない。本来「通信」とは「心」を「通わす」という意味であるが、自分勝手に通信機器を利用すればよいと考えている若者が多い。江戸川大学では教育理念に「人間陶冶」を掲げているが、「心」が豊かで「おもいやり」のある人材を育成することが主眼である。こうした観点から情報処理技術をしっかりと学んだうえで本来の「コミュニケーション力」に高めることが肝要である。「情報教育」において重要なのは「情報」の中身である。メール中心の風潮のなかで失われつつある「人間性の回復」にいかにか寄与していくかが問われている。

こうした時代状況のなかで情報研究所としては 21 世紀における「情報教育」と「環境」のあり方についてさらに一層の研究を進めていきたい。